

平成23年度 春日部共栄中学校

第1回 入学試験問題

国 語

(50分, 100点)

受験についての注意

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙を開かないでください。
2. 問題は ㊦・㊧ の2問です。
3. 解答は解答用紙（別紙）の所定の欄^{らん}に記入してください。
4. はじめに受験番号、氏名を解答用紙に必ず記入し、最後にもう一度^{かくにん}確認してください。
5. 〈＝ 〉は直前にあることばの説明です。
6. 解答用紙のみ回収します。

一

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

ここ十年のあいだに、「ひきこもり」ということばはすっかり日本社会に定着した感がある。全国でその数は百万人以上にのぼるといふ^①シサンもあり、中高生の二%が不登校であるとも言われている。一昔前なら、「社会的に無気力な状態に気持ちが落ち込む」とでも表現するしか術^{すべ}がなかったこの現象は、拡大こそすれ、おさまる気配を全く見せていない。

典型的には、自分の部屋に鍵^{かぎ}をかけて閉じこもり、下界との一切の交渉を断つ。食事も部屋まで持ってこさせ、自分ひとりで摂^とることも珍しくない。昼夜の生活リズムが逆転し、昼間に寝て夜起きだして、テレビを見たり、コンピューターゲームに興^{きよう}じたりする。

けれども「ひきこもっている」からと言って、犯罪者の予備軍と **I** のは全くの誤解にすぎない。ひきこもりの増加が犯罪率の増加につながったという証拠は全く存在しない。ソウじて日本の青少年の犯罪率は、欧米よりはるかに低い。^②

むろん、だからと言って、ひきこもりを思^{おも}い^い春^{はる}期^きに^あり^がち^な一^い過^い性^{せい}の「心の揺^ゆらぎ」ととらえることは適切でない。それどころか、ひきこもりは決して若者全体の二%に限定して生じている現象ではない。むしろ反対で、ルーズソックスをはいたり、靴のかかとを踏みつぶしたり、地べたに平気で座ったり、歩きながら飲食をする者すべて、本質的には自分の部屋に鍵をかけて閉じこめる暮らしと変わらないように、私には映る。

両者に共通しているのは、「家のなか」すなわち私的空間から公共の場に出ることの拒絶である。「家のなか主義」とでも表現すべきスタイルだろう。異なるのは、個々の若者が「家のなか」の範囲をどれだけの広さと自己定義し、自分が活動する領域をどこまでとみなすかだけであって、いったんその縄^{なわ}張^はりを決定してしまうや、そこ³からなかなか足を踏みだそうとしない点では、双方とも見事に一致しているのである。

「ひきこもり」と呼ばれている人々（ひきこもり系）と呼ぶことにしよう）は、自分の家のなかにすら、「家の外」と認める空間があることが少なくない。もつとも極端な場合は自室のみを「家のなか」と把握し、その外へ出ることを拒^{こは}む。親ですら、私的領域からは排除される、いわば異邦人^{いほうじん}と化する。

他方、ルーズソックスに代表される「ふつう」の若者（「ルーズソックス系」と名づけよう）では、正反対に通常の空間（そこは、従来の大人にとって限られた私的空間と残りの広大な公共空間であるのだけれど）すべてにおいて、ひきこもり系の自室のような感覚でいられるのである。つまり、どこでも Ⅱ。

ファーストフードショップへ行っても、自分と仲間たちだけで大騒ぎして楽しめる。居合わせた客はやはり異邦人である。ただ、ひきこもりと違って、他の客たちは店内のテーブルやイスと同じで、人であって人でない。人と認められるのは仲間だけなのだから。

ひきこもり系とルーズソックス系の差異をあえて挙げるならば、異邦人の棲む異界（そこは通常の大人にとっては、いわゆる社会なのだが）を恐怖と感ずるか、あるいは無感覚でいられるかという点にあるのかもしれない。結果として、前者はひとりでしか食事を摂れないし、後者は電車のなかでも平気で化粧をし、ケータイで会話することができるのだろう。では、なぜ一方は恐怖を覚え、一方は無感覚でいられるのか。

いずれの系に属する者にとっても、③ テンキが思春期にやってくることは、おおよそのところ確実なようである。そのころを境にして、行動がおのおのの系に特徴的な様相をオビ^④るのだ。思春期とは、すなわち自我の芽ばえるころである。

自我の芽ばえとは何かと言うと、それはまさに自分が自己実現を何らかの形で達成したいという欲望にかられることを指すと言いかえても、差し支えないだろう。そして自己実現を成すためには、「家の外」へ出かけていかなければならない。だが、そこには家のなかにはない軋轢^⑤がある。

軋轢は挫折を生む。家のなかでは望むままに通ったことが、外では通用しないことを知る。これにどう対応するかが分岐点^⑥となってくるのではないだろうか。

挫折した自分、あるいは自分で思い描いたように自己実現できない自分を許せないと否定的態度を取ったならば、ひきこもり系へ向かう確率が高くなる。反対に、思い通りにならなくとも、それは非が自分にあるわけではないと徹底的に居直り、「家の外」という環境までも「家のなか」とみなすことで今までどおりやっていきましょうという態度を貫くと、ルーズソックス系に属する

ようになっていくのかもしれない。

（正高信男『ケータイを持ったサル』より）

問一 部①～⑤の漢字にはよみがなを、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 Ⅰに入る適当なことを、問題文中からひらがな三字で抜き出して答えなさい。

問三 部1「思春期」の特徴を作者は「どうすること」だと考えていますか。問題文中から三十字程度で抜き出して、その部分を含む一文の最初の八字を答えなさい。（句読点も字数にふくみます）

問四 部2「一過性」の意味として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人が、過去にとらわれて不自由に行動するようす。
- イ 人が、一つのことにひたすら神経を集中するようす。
- ウ 現象が、短い期間に起こり、消えてしまう性質。
- エ 人やものの、価値のない、取るに足りない性質。

問五 部3「そこ」の指示する内容を、問題文中から十字以内で抜き出して答えなさい。（句読点も字数にふくみます）

問六 部4「双方」とは、何と何を意味しますか。それぞれの行動の特徴にふれながら、七十字以内で説明しなさい。（句読点も字数にふくみます）

問七 問題文中で作者は、「家の外」に対して「家のなか」とひらがなで表記しています。その理由として考えられることを、七十字以内で説明しなさい。(句読点も字数にふくみます)

問八 Ⅱ に入ることばとして適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア さいなまれる イ くつろげる ウ おそろしがる エ いきたがる

問九 〃部5「軋轢」と同じ意味のことばを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 不和 イ 不備 ウ 不遇 エ 不問

問十 〃部6「分岐点」は、何と何との分かれ道ですか。その説明として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 理想を追求する自分と挫折を味わう自分。
イ 自我が芽ばえる前と自我が芽ばえた後。
ウ 異邦人に同化する若者と異化する若者。
エ ひきこもり系とルーズソックス系。

二

次の文章は、小学生の伊山佳奈が学校の帰りに、ツツジがたくさん咲いている新しい道を見つけたところから始まります。後の問に答えなさい。

私は一番おしげのない感じのオオムラサキをつんだ。ほんのちよつとだけ、チュツと甘く、すぐに味のしなくなる花。つつじのミツをすう時は、絶対に一つだけではすまなくなる。私は次々にオオムラサキをむしっては、味見をしてすてた。そんな風に、短いつつじナミキの中をはしからはしまで歩いてしまった。

何気なく、ふりむいた私は、オオムラサキの花が点々とつながる、濃い桃色の道しるべに目を見はった。へびのようにきまぐれな曲線だ。左右の花をつんで、私がちよちよこと歩いた道を、ピンクの線がなぞっている。

私は胸がどきどきした。自分がやったことではない気がした。証拠を残したなと思った。

(どうしよう)

このままにしておいたら、誰か大人がやってきて、花をつんだことを怒るかもしれない。でも、ひろってしまふのはいやだった。知らない間に出来た花の道しるべは、どうしようもなく私をわくわくさせたのだ。何か特別な意味があるような気がした。たとえば、物語の中の大好きな人達を、ここに連れてきてくれるような……。

私はすっかり夢中になった。

もつともつと、きれいにしよう。誰もがあつと言うほどきれいな道しるべを作ろう！

オオムラサキの花をきちんとふせて置き直す。淡いピンクのアケボノをちぎって、オオムラサキの花の間にいれてみる。道のはしまで走って様子を見る。

うん。なかなか。でももうちよつと。

キリシマもたくさんつんだ。薄い黄色のヒカゲツツジもならべてしまった。

道しるべは、まるで美しい花のくさりのように、その世で一番かわいいへびのように、舗装道路の上に横たわった。私はながめて満足した。

午後の日がだいぶ傾いている。建物のかげがどっしり道に広がって、花の色をなんだか寒い感じにしている。A―36のページの壁は西日を受けて、やけに赤っぽく見えた。私は放り出したランドセルを背負った。急に家が恋しくなった。

何かに熱中していて、思いがけず時間がたってしまったことに気づくと、いつもちよつとだけこわくなる。A棟の建物や人のいない道がひどくよそよそしく見え、帰ろう、さあ帰ろう、と胸の中で号令をかける。

「ごめんね。帰らなきゃ。明日、明日、また来るから」

道しるべに話しかけたが、明日まで、花の列はそこにあるだろうか。じっとしてしてくれるだろうか。

私はいいことを思いついた。

「家まで、つれていったげるよ！」

C―3の505号室まで、道しるべをつなげばいいのだ。誰かが、これを見てやってくるなら、当然、伊山佳奈の家まで来なければならぬ。誰か？誰？誰だろう。すてきなお客さんがいい。五月のすてきなお客さんにきまつて！

私はスカートのすそを持って、つつじの花を手当たりしだいにつんでいった。もう色は何でもかまわなかった。たくさん、たくさん数があるのだ。別れ道や曲がり角に、ちゃんと置いていけるだけのつつじが必要だった。

最初に音がした。私はあんまり夢中になっていたもので、そのすさまじいガラガラが自分のそばに近づくまで、気づきもしなかった。ガラガラガラガラ。道路を車輪がこする音。普通の自転車なら、あんなにうるさい音はたてない。ガラガラガラ。まだ自転車に乗れないチビがつけているホジヨ^③輪のひびきだった。

私はふりむいて、弟の進が、真新しいホジヨつき自転車で、つつじの道しるべをひいていくのをじっと見ていた。なぜか、声^④をたてることができなかった。

大小四つの車輪が、濃いピンクや薄いピンクや朱色の花を次々とふみつぶしていく。私は自分の胸がつぶれるような思いがした。道しるべがこわれる！

進は私に気がついた。

「あっお姉ちゃん……じゃなくて、カーナ」

彼は感心にも私をカーナと呼んだ。大きな黒目がうれしそうに光っている。進もまた、親の言いつけを破り、一人でこんなに遠くまで来ていたのだ。だいぶ心細かったところ、思いがけず私を見つけて喜んだのかもしれない。

だが、私は返事をしなかった。進は、私が手をはなし、スカートから足元にこぼれ落ちたたくさんつつじの花をまじまじと見た。

「ああ、あーあつ……」

いつけないんだと言おうとしたのだろうが、その前に私はおんおん泣きだしていた。

「こわしたあ、こわしたあ、進のバカあ」

弟は自転車にまたがったまま、ひどくおびえた顔をした。でも、私は彼を指さして、泣きながらなった。

「あんたが悪いのよ。直してよ。もどおりにしてよ」

進は自転車^⑤がふみにじった花の道しるべと私の顔をかわるがわる見比べた。そして、自転車をおりると、道に散らばったつつじの花を一つ二つひろい上げて、また私を見た。

「直してよ！」

私はさけぶ。一度かんしゃく玉がはれつすると、とことん泣きさけぶのが私のくせだった。

大切な花の道しるべ。あんなきれいなものの上をどうして自転車で走ることができるのだろう。なんでこんなバカな弟がそばにいるのだろう。急に冷たく強くなった夕方の風が、車輪にひかれた花の列をいよいよバラバラにこわしていった。

私は泣きながら自転車を足でけた。進のホジヨつき自転車。あのいまましい新品の自転車。がしんと耳ざわりの音がして、自転車はよろめいたが、三十センチほど地面をすべただけで、たおれなかった。

進は怒りもせず、ますます大きく目を見開いた。やがて、彼は道に散らばったつつじの花をひろい集めて、自転車のかごに入れ

た。つぶれた花も、無事だったものもおかまいなしにどんどんひろっている。自転車をそのままにして自分がちょこまか動きまわるため、全部の花をひろってしまうまでにはずいぶんと長い時間がかかった。

かごにぎつりつめこまれた明るい色の花たちは、夕ぐれの中であらうろろとして見える。私は、そのもっそりとした不気味なカタマリから目をそらした。それは、つつじでも道しるべでもなく、私のぜんぜん知らない不吉でいやなものだった。

母は、私がヒステリーをおこしたのを目で見やぶった。わけを説明しなければならぬ話していくうちに、私はちょっとづつが悪くないと思つた。

「わざとお姉ちゃんが作つたものをこわしたんじゃないわね。」 A

母は進に聞いた。進は大きくこっくりとうなずいた。

B

かぶりをふる。まるで言葉をどこかに置き忘れてきたみたいだ。

C

母にうながされても、進はむっと押し黙っていた。自分が悪くないとおもっている時の進はひどくがんばりで、誰の言うこともきかない。

「きれいに咲いているお花を、そんな風にむしっちゃいけないのよ。わかってるわね」

母はそれ以上進にかまわず、今度は私に向かって言った。

「うん」

私はしぶしぶ答える。母が進のミカタについているのがわかるので、おもしろくない。

D

「うん」

「どのくらいたくさん？」

その質問に答えるのはむずかしかった。気が進まなくもあつた。

「百個かな？」

私は首をひねった。

「進の自転車のかごにうんといっぱい」

「そんなに取つたの？」

母は声をはりあげた。

「だめよ！ そんなに取つちゃダメ！ お花を取つたりしたらいけないの。さあ、もうしないって約束してちょうだい」
けつきよく、私が怒られたのだった。これはおもしろくないので、母がいなくなると、私は進をめぐりつぱいこづいた。

「明日の朝までに、お花、もどおりにするのよ！ いい？」

「どうやるんだよ」

「自分で考えるの！」

すると、進は見たことがないほどこわい目をして、私をにらんだ。大きな黒目がちぢんで白目ばかりになったように見えた。

(佐藤多佳子『五月の道しるべ』より)

問一 ― 部①～⑤の漢字にはよみがなを、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 A D に入ることばとして、適当なものをそれぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(同じ記号を二度以上使ってははいけません)

- ア たくさん取ったの？
 イ 意地悪したんじゃないでしょ？
 ウ どうしてそんなことしたの？
 エ お姉ちゃんにあやまったの？
 オ ごめんなさい、は？

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ

問三 ア イ